

糖尿病・内分泌代謝内科 / リウマチ・膠原病内科

部長 公文 義雄

はじめに

私どもは上記を対象に診療に努めているが、早くも年報の季節となった。日々の診療データの一部をご紹介させて頂き今年一年のサマリーとさせて頂く。

当科の診療は糖尿病やリウマチに習熟している先生方で担当している。専門を他に持っておられる総合診療科の浅羽宏一先生、中山修一先生、脳神経内科併任の吉田 剛先生のほか、非常勤の近澤宏明先生と吉村江理先生と私の 6 人で診療にあたった。他に内科で研修された数人の研修医も診療に参加して頂き、多忙ではあるが楽しい中に実績に貢献できた。外来担当の詳細は病院の HP でご確認頂きたい。

入院患者は本館、北館全病棟にわたるが、外来センター 6 階の呼称を変更した。従来の「糖尿病センター」「リウマチ・膠原病センター」で専門のスタッフと一緒に活動してきたが、最近、抗がん剤である免疫チェックポイント阻害剤が使用されるようになり甲状腺疾患、1 型糖尿病や筋炎などの膠原病様の難病態などを副作用として発症し、時にご紹介頂く。また、新たに神経難病などの新たな領域にも生物学的製剤(生物製剤)による治療が広がり始めたこともあり、従来のリウマチ・膠原病センターから、「リウマチ・免疫難病治療センター」に発展的に改名した。多くの疾患に対応できるよう現在調整しているところである。

当科の診療実績をお示しする。救急病院である当院は、あくまでも救急搬入された患者を良くして紹介元に返す役割を抱えており、我々にもそれを支える役割が求められている。救急搬入される糖尿病・内分泌代謝疾患の合併症例やリウマチ難病例は一部では退院後も当外来で経過を診ることもある。また、院内から外来にご紹介頂く患者さんも次第に増えており、今までは外来通院患者は右肩上がりであった。当院の診療の戦略の変更により、受け入れ入院患者がスムーズに流れるよう逆紹介を増やして外来通院患者を減らすよう指示されている。当科へ通院される患者さんの延べ人数の変遷は下図のごとくである(図 1)。2020 年の実績は 2019 年とほぼ同数で我々の努力は実った形であり、むしろ予想以上の成果であった。今後もさらにこの傾向を要求されるであろうが、リウマチ・膠原病では生活習慣病である糖尿病とは異なりこの継続は難しい点もある。必ずしも容易に医療連携で対応できるとも限らず、一工夫が今後必要になるかもしれない。

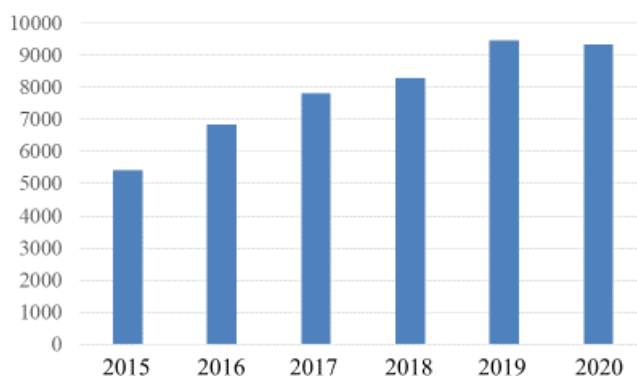


図 1 当センター外来受診のべ患者数

糖尿病・内分泌代謝内科の診療

毎年記載しているが糖尿病診療は日々進化しており、患者さんに負担の少ない安全で安心な治療の方向に向かっている。図 2 は当院の糖尿病処方薬の変遷であるが、DPP4 阻害薬の汎用

は続いており本邦全体の傾向と同じである。2020年のトピックスは、新世代のGLP-1製剤の充実と、また、インスリンとGLP-1製剤との合剤の上市であり、これらの安全な使い方に関係する新たな進歩があった。また、従来心血管イベント抑制に有用と考えられてきたSGLT2阻害薬であるが、ダパグリフロジンは糖尿病診療を超えて「心不全」への適応拡大となった。この適応拡大は近年予想されていたことではあったが、今更ながらSGLT2阻害薬の開発者の先見の明には驚かされる。

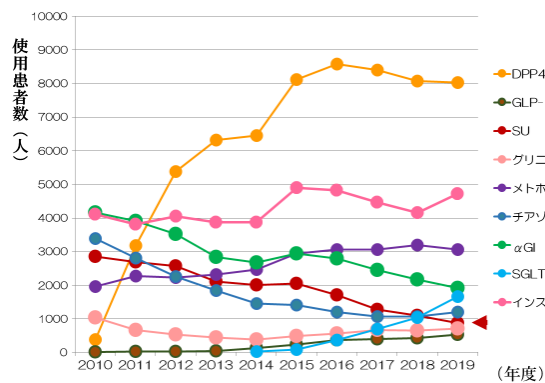


図2 当院の糖尿病薬処方の変遷

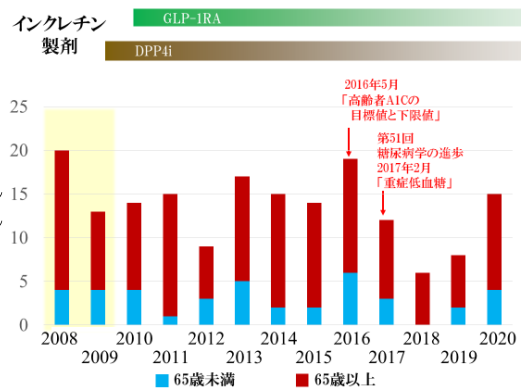


図3 低血糖症で入院した糖尿病患者数の推移

また、当院に救急搬入される高齢者を中心とした重症低血糖発症の変遷を図3に示した。我々も予防に繋がる啓発には務めてきたつもりではあり、その数も一時減少傾向ではあったが、再度増加しており当院への搬入者数は必ずしも減っている訳ではない。糖尿病は国民病であり一般医家のお力をお借りしての診療となっており、重症低血糖発症の予防にはまだまだ力不足である現状が見て取れる。この陰にはインクレチン製剤の普及があり、併用量が以前より少なくて済むSU薬とDPP4阻害薬の併用が関係しているようである。また、当院のSU薬使用量は順調に低下している(図2、4)が、医療安全上の観点から転換期を迎えた。当院ではSU薬はグリメピリド錠のみの採用であったが、3mg錠を2015年、1mg錠を2020年に採用中止とさせて頂き、現在使用できるものは0.5mg錠のみとなった。ただ、搬入される重症低血糖患者を診る限りアマリール0.5mg服用でも重症低血糖を発症しており注意を要する。

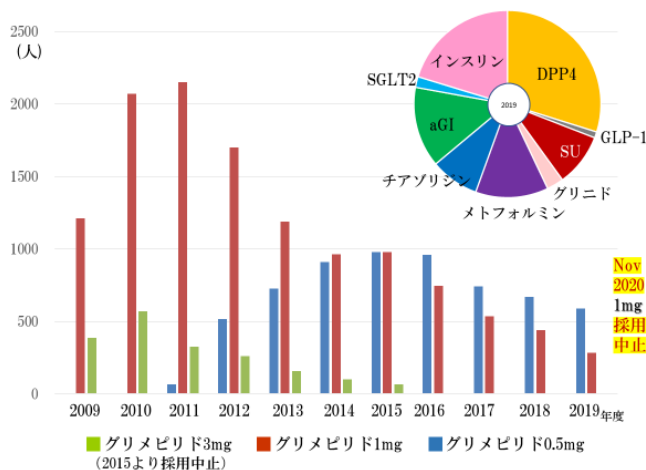


図4 当院のSU薬使用量の変遷

リウマチ・膠原病内科の診療

リウマチ・膠原病の当科へのご紹介はER・救急搬入患者と外来センターとが中心であり、外来センターへは院内他科の先生からと近医のみならず高知県全体の先生方からよくご紹介を頂く。入院患者のご紹介では結構重症の患者さんも多く、また、難病態を呈して治療が遅れると重症化するため時間的余裕もなく診断と治療に素早い対応が求められる。治療は予後に直結

するため他科と積極的に連携する事が重要である。

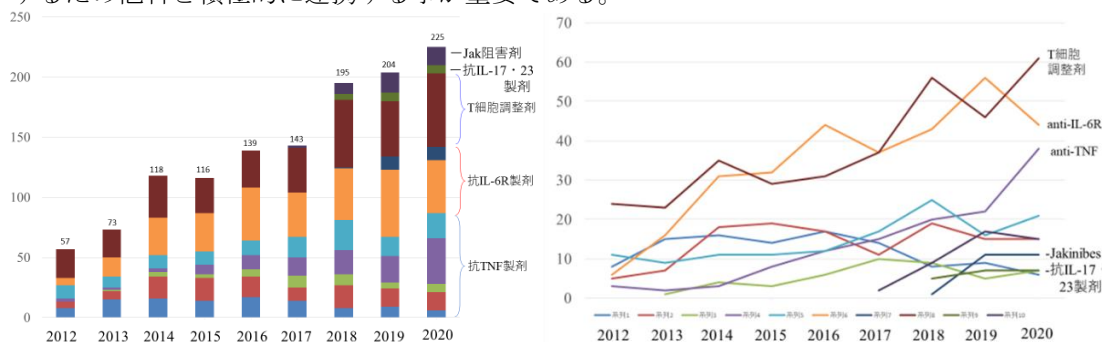


図 5、6 各生物学的製剤・Jak 阻害剤の使用量の推移

当科の診療実績を一つお示しする。何と言っても当科の実力とその評価は診断と治療であり、治療内容で診療科全体の活動性が見えてくる。関節リウマチには MTX の使用が基本であり乾癬性関節炎などの炎症性関節炎にも用いられるが、これらに用いられる生物製剤や JAK 阻害薬の使用(図 5、6)が評価の際には一つの指標となりうる。高額な治療薬ではあるが注射・点滴薬である生物製剤は製剤管理上の問題はあっても有効性と安全性はほぼ確立されているが、簡便な経口剤である JAK 阻害薬が普及するにはもう少し時間がかかりそうである。我々は経済性も考慮し、寛解が導入され病状が落ち着けば生物製剤を中止するため上記の中には寛解後中止した例も結構ある。また、SLE や血管炎症候群などにも生物製剤が開発され臨床応用されており、ステロイドを漫然と続けることはもうない。上記の事情より、診断確定後に治療目的にご紹介頂く症例は比較的少なく、殆どは当院で診断して治療を開始することが多い。その点、SLE などの膠原病に用いられる薬剤と使用例数はベリムマブ 16 例、メボリズマブ 4 例、リツキシマブ 4 例などで当院は患者さんの出入りが多い救急病院であることをご考慮頂き当科の日常診療の現場をご推察頂きたい。

最後に

我々の目指す医療活動は、お困りの症例に対する適切な診療であり、最新の医療知識と医療技術を駆使して患者さんに喜んで頂き主治医にお返しすることである。診療スタッフと共に常に患者さんに親切で、患者中心の医療に努めたいと考えている。最近、日々の診療への私どもの姿勢がやっと皆様方に伝わり、多くのご支援を頂いていることを日々感じるようになってきた。この成果は地域の先生方のご支援の賜物であり、更に努力して結果を共有していきたいと考えている。

当科は生活習慣病から、希少疾患を扱う難しい診療科と先生方に捉えられることもある。しかし、どの疾患も同じであろうが、基本の病態の理解とその合併症の捉え方が診療には重要であり、我々は日々進歩する良い治療と提供して、また、経験を積んで我々自身も継続的に成長する必要がある。その点、子育てなど予定を立てて生活でき、キャリアを継続できる点、女性医師には向いているし、我々は大歓迎である。是非、門を叩いて頂きたい。

学術発表・講演会等

学会発表

演題	発表者 共同研究者	学会名	開催
Ultrasound Assessment of Sarcopenia in Patients with Rheumatoid Arthritis	Takeshi Yoshida Yoshitaka Kumon	ACR Convergence 2020	11月5日～9日(ALL VIRTUAL)
Behind the Eye	Hiroataka Yamamoto Takeshi Yoshida,	ACR Convergence 2020	11月5日～9日(ALL VIRTUAL)
骨格筋超音波によるサルコペニア評価の有用性の検討	吉田 剛 公文 義雄	第50回日本臨床神経生理学学会学術大会	11月26日～28日 京都(ハイブリッド開催)
経過中に多発動脈瘤が自然消退したサルコイドーシスの1例	中山 修一 吉田 剛、浅羽 宏一、公文 義雄	第31回日本リウマチ学会中国・四国支部学術集会	12月4日～13日(WEB開催)
関節リウマチ症例に対する骨格筋超音波を用いたサルコペニアの評価	吉田 剛 公文 義雄	第31回日本リウマチ学会中国・四国支部学術集会	12月4日～13日(WEB開催)

講演

演題	発表者 共同研究者	学会名	開催

論文発表・著書

タイトル	執筆者 共同執筆者	掲載誌 出版社	巻・号 ページ
内科実臨床の現場から Spondyloarthritis, message from the actual medical field of clinical practice	公文 義雄	関節外科 基礎と臨床 別刷 メジカルビュー社	Vol. 39 No. 4 p. 440-451
他施設共同疫学研究による体軸性脊椎関節炎の実態調査 2018	吉川 卓宏、多田 久里守、井上 久、小林 茂人、浦野 房三、近藤 正一、大西 直樹、渥美 達也、佐々木 貴紀、竹内 勤、公文 義雄、梅田 雅孝、川上 純、田村 直人、松井 聖	日本脊椎関節炎学会誌	Vol. VII, No. 2, 71-76
Detection of nerve enlargement with ultrasound and correlation with skin biopsy findings in painful sensory neuropathy associated with Sjögren's syndrome	Takeshi Yoshida Hiroyuki Nodera, Yoshitaka Kumon, Saeko Osanai, Yuishin Izumi&Hiroyuki Mizukami	Modern Rheumatology	2020;13
Diagnostic usefulness of denervation edema in the multifidus muscles using 3 - Tesla magnetic resonance imaging in cervical radiculopathy	Takeshi Yoshida Syugo Suwazono, Takeshi Sueyoshi, Yuishin Izumi, Hiroyuki Nodera	Muscle and Nerve	2020;1-6
Sequential Involvement of Oculomotor Nerve and Optic Nerve Sheath in Relapsing Polychondritis	Yoshihide Ikeda Takeshi Yoshida, Hiroataka Yamamoto, Masatsugu Hashida, Kimiaki Urabe, Chie Sotozono, Ken Fukuda	Journal of Neuro-Ophthalmology	submitted